

## 今も青春

和田奈良子

四年前から透析を始めた。しかしそれは、納得して始めたわけではない。体がパンパンにはれ上がり、食事も摂れない状態が続いていた。腎不全を起こし、糖尿病の末期と診断され、治療の限界にきたからだ。

不安でいっぱい、透析を始めたが決して簡単なものではなかった。太い針が入った時から終了の四時間、痛くて痛くて苦しかった。済んでもからも痛みは続いた。両眼は手術をしたものの、あまり芳しくなく、今ではすっかり人相も変わってしまった。こんな姿は見られたくなかった。昔の友達と会うのも嫌になった。

筆で手紙を書こうとしても手が震えてしまい、字がうまく書けなくなってきた。だんだんと意固地になっていくのが感じられた。今でも透析の日には、家に帰り着くなり、ぐったりとベッドに倒れ込んでしまう。

いったい何のために生きているのだろうか。何かをするという覇気もなく、毎日をただぼんやりと過ごす日々が続いた。気が遠くなりそうだった。

そんな時、小学一年の孫がパソコンに熱中しているのを知った。幼稚園児の頃から父親がパソコンをしている姿をじっと観察していたが、いつの間にか習得してしまったよう

だ。文字だけでなく、絵も描けるようになっていた。「これだったら、わたしにもできるのではなからうか」と思うようになった。わたしはいつの間にかパソコンに興味を示すようになり、欲しくなった。それを聞くと、周囲の者がみな反対した。「とても目に負担がかかるのよ。それに、全然難しさが分かってないでしょ。若い人でさえ、四苦八苦しているっていうのに。テレビと違って、スイッチポンじやないのよ」長女はそう言った。確かに、パソコンというのが何なのかよく分かっていなかった。しかも、日常生活すら人の世話にならねばならない体だった。一度は、それであきらめた。

ところが、パソコンでメールができることを聞いた。メールは自分で字が書けなくても、活字できれいに打てるそう。これだったら、手が不自由なわたしでも、字が書けるのではないだろうか。これは、思いもしない知らせだった。ぜひ、孫とメールの交換を試みたい。思い悩んだ末、わたしは思い切って買うことを決断した。

一日でも早く、字を打てるようになった。早く、孫の喜ぶ顔が見たい。そこで早速、知人にパソコンを教えるようにした。

電源はどれか、マウスとは何か、電話回線とは何か。説明書を見ても、どこに何が書いてあるのかさっぱり分からない。宙では覚えきれないので、紙に電源の入れ方から、切り方までを細かに書いてもらった。これを覚えるまでに、相当の時間を費やしてしまった。こんなことでは、いつまでたっても孫にメールが送れない。

何とか一人で紙を見ながら、電源の入り・切りはできるようになった。メールの送り方も、全て紙に書いてもらった。毎日少しずつではあるが、字を打つ練習も始めていった。

数行ではあるが、メッセージを書き終えた。いよいよ、孫にメールを送ってみようと思つた。なんだかとても緊張してきた。紙にかいてある通りにしたが、果たして無事に送ら

れたのだろうか。心配になったわたしは、早速孫に電話をして、着いたのかを確認してもらった。どうやら、着いていたようだった。本当にわたしの文章が届いたのかを確かめるため、どんな内容だったかを聞いてみた。

孫が言うには、間違いだらけの字ばかりで、とても読めないらしかった。行がくっついていたり、点と丸の区別がなかったり、それでも、わたしの送ったものがきちんと着いていたのだ。「良かった、紙を見ながらも一人で送れたんだ」という実感が初めてわいてきた。孫が、「ばあちゃん、すごいね」と言ってくれた時には、本当にパソコンを買ってよかったと思った。孫との距離がいつそう縮まったようにも感じた。

それからは、時間がとても貴重になった。体力のないわたしにとって、消耗の激しいパソコンの操作は、一日一時間までが限度である。確かに、わたしの目にかかる負担は大きい。しかし、終わった後は、疲労感を忘れさせるほど達成感でいっぱいになってくれる。孫とメールの交換ができることは、こんなにも嬉しいことなのだ。そう、しみじみと感じたことだった。今だって、まだわたしにとっての青春時代なのだ、と思うことにした。

(付記)

- 一 本作品は、平成十三年度「おんなのエッセイ」(九州電力主催) 入選作品
- 二 作者は、平成十七年十二月没(八十一歳)